

令和7年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	5	学校名	静岡聴覚特別支援学校	校長名	佐藤 容子
------	---	-----	------------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

※「達成状況」について

A B評価の割合：下段☆：幼児児童生徒・保護者からの評価、上段★：教職員からの評価

※「評価」について

A：成果目標の達成、B：成果目標の未達、C：成果目標の未達（「達成状況」のCD3割以上を該当とする。）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	◎成果と●課題
ア	一人一人の良さや人格を認め、多様性を尊重する思いやりの心の醸成	・互いの良さに気付き、自分も友達も大事にしながら学校生活を送ることができる子 【幼児児童生徒・保護者・教職員 AB90%】	AB ★100% ☆100%	A	◎ 帰りの会での「友達のいいところ探し」や道徳の学びの共有等の取組により、子どもたちの互いの良さに気付き、認め合う場面が増えた。 ● 自己肯定感が低い子へのアプローチの工夫、気持ちの伝え合いを行動につなぐ工夫、縦の交流の工夫が更に必要。
イ	自分の命を守る防犯及び防災等安全教育の充実	・訓練や学習をもとに、自分の命を自分で守るための考えをもち、行動する子 【幼児児童生徒・保護者・教員 AB90%】	AB ★96.5% ☆90%	A	◎ 火災、地震、防犯に加え水害などの多様な訓練を繰り返したことで、状況に応じた避難行動や命を守る意識が向上した。 ● 防災・防犯訓練のマンネリ化、実効性のある様々な場面を想定した訓練や危機管理マニュアルの見直しが必要。
イ	健全な心と体の成長促進及び自己管理能力の向上	・友達と一緒に身体を動かしたり、関わりをもったりする子 【児童生徒・保護者・教員 AB90%以上】 ・自分のことを深く知ることができる子 【児童生徒・保護者・教員 AB90%以上】	AB ★96.6% ☆91% AB ★100% ☆82%	B	◎ 幼稚部の遊び、小学部のおはようタイムの取組や、全学部合同の「ポッチャ大会」などのスポーツ行事を通じ、学部を超えた交流と運動を楽しむ姿勢につながった。また、各種検査や自立活動でのトリセツづくり、スクールカウンセラー（SC）との連携やストレッチスカードの取組などが、客観的な自己理解を深める一助となった。 ● 休み時間を確保し自主的に運動を楽しむ姿勢につなげることが必要。自分と向き合う場面を増やすこと、取組を単発にしない工夫、保護者の協力を得た取組にしたい。
ウ	ICT活用による個別最適な学びの実現	・ICTを活用した学びが、「分かる」「楽しい」と感じている子 【幼児児童生徒・保護者・教員 AB90%以上】	AB ★96.6% ☆95%	A	◎ 活用場面を増やし、ICTの活用の良さを生かした実践により、写真検索やアプリでの復習などの学習への興味・関心が高まった。中学生はタブレットを文房具のように使いこなすことができるようになった。

様式第3号

					●ICT活用に教員間で差があり 教員研修の設定、通信環境、機器等の整備の必要があること、児童生徒のICT学習の理解の評価や定着のための工夫などが必要。
エ	子どもが楽しく対話し協働することで、資質・能力を身に付ける学びの実現	・「自分で問いを見つける学びが楽しい」と答える子 【幼児児童生徒・保護者・教員 AB90%以上】	AB ★96.3% ☆59%	B	◎各学部での講師招聘研修で得た学びを生かし、研修テーマに沿った「わかる」「できる」を目指しながら子どもたちが生き生き学び合うための授業実践を行うことで、学習発表会単元や総合的な学習の時間の調べ学習などの子どもたちが自ら問いを見つけて調べる姿につながっていた。 ●授業を見合い教師が学び、授業改善につながるための互いに見合う時間の確保が必要。
エ	自立活動の指導を通じた充実した聴覚障害教育の実現	・「人との会話が楽しい」と答える子 【幼児児童生徒・保護者・教員 AB90%以上】	AB ★100% ☆85%	B	◎絵日記の取組、傾聴を大切にする子どもとの関わり、交流等関わる場の設定などにより、意思を伝えたいという意欲が向上し、子ども同士の関わりや、ランチルーム等では学部を超えた人との自発的な会話を楽しむ様子が増えた。 ●聞き返しも含め、互いに分かり合える話し方、「自立活動の指導のめやす」を活かしたやりとりなど、更なる指導力の向上が必要。
オ	共生社会を生きる力につながるキャリア教育の充実	・『交流及び共同学習』の積み重ねから得られる学びが楽しい」と答える子 【幼児児童生徒・保護者・教員 AB80%以上】	AB ★100% ☆100%	A	◎交流籍校や学校間交流の場が増え、それぞれの発達段階に応じ子ども自身が目標をもち、他校の友達との関わりを楽しんだりする様子も見られた。 ●子どもが立てる目標設定への助言、振り返りの時間の確保、学校間の連携体制や教員間の打合せ等の調整、子どものニーズに応じた交流活動の工夫等の再考など行いたい。
オ	ウェルビーイングの向上による教育活動活性化のための学校体制づくり	・「主体的に教育活動と事務業務の連携を図った」と答える教職員 【AB80%以上】	AB ★100%	A	◎事務室との連携により会計業務等の負担が軽減され、教員が児童生徒への対応に充てる時間が増加した。 ●事務室の校務参画の具体的内容について、校内での共通理解が必要。
カ	校内外の専門性を生かした教育相談及び乳幼	・必要な情報等が得られ、安心して相談を受けられた教育相談利用者 【AB80%】	AB ★100% ☆100%	A	◎外部施設への巡回やコーディネーターとの連携により、保護者の不安や悩みに手厚く寄り添う支援ができた。

様式第3号

	児教室の充実				●教育相談のニーズの把握とそれに応じた対応の仕方についての共通認識、体制づくり、情報発信等が必要。
キ	在籍校と連携した通級指導教室の充実	・自己理解が深まり、在籍校の学校生活が充実していると答える通級児童生徒及び保護者と在籍校担任 【AB80%】	AB ★100% ☆100%	A	◎丁寧な指導により、通級生が自分の聞こえの特徴を学び、在籍校での生活を充実させていると評価されている。 ●増加する通級による指導のニーズへの学校体制づくりが必要。
ク	特別支援学校のセンター的機能の推進と充実及び関係機関との連携の強化	・「校内や関係機関、3聾との連携を図りながら、センター的機能を発揮できていると答える教職員 【AB90%】	AB ★100%	A	◎デフリンピックを契機とした地域・他校との連携や、三聾（県内の聴覚特別支援学校3校）合同研修、地域支援を中心に医療、その他の機関との連携や情報共有が進展した。 ●特別支援教育コーディネーターや連携コーディネーターが、校内支援などの連携体制で持続的な校内支援の組織体制づくりが必要。